



平成29年3月8日

スーパーサイエンスハイスクール（平成26年度指定）の中間評価について

「スーパーサイエンスハイスクール」について、平成26年度指定校の中間評価を実施しましたので、お知らせします。

1. スーパーサイエンスハイスクールの中間評価について

文部科学省では、将来の国際的な科学技術系人材の育成を図るため、科学技術・理科、数学教育に関する研究開発を行う高等学校等を「スーパーサイエンスハイスクール（以下「SSH」という）」に指定し、理科、数学等に重点を置いたカリキュラムの開発や大学等との連携による先進的な理数系教育を実施しております。このSSHの中間評価は、指定から三年目の学校について、SSH企画評価会議協力者（外部の有識者）による研究開発の進捗状況等の評価を行い、各学校が研究開発等の内容を見直す機会とし、事業の効果的な実施を図ることを目的とするものです。

2. 中間評価の結果について

平成26年度に新たに指定した9校について、SSH企画評価会議協力者による中間評価を行い、別添のとおり評価結果を取りまとめましたので公表します。

(問い合わせ先)

初等中等教育局教育課程課

課長補佐 金城 太一 (内線2363)

係長 荻野 雅裕 (内線2613)

電話：03-5253-4111 (代表)

電話：03-6734-2613 (直通)

○ 中間評価の結果について

- ・「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」（1校）
〈学校名〉
富山県立富山中部高等学校

- ・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」（4校）
〈学校名〉
学校法人市川学園市川高等学校・市川中学校 東京都立戸山高等学校
福井県立藤島高等学校 岡山県立岡山一宮高等学校

- ・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる」（2校）
〈学校名〉
千葉県立船橋高等学校 学校法人大阪医科薬科大学高槻高等学校・中学校

- ・「研究開発のねらいを達成するには、助言等を考慮し、一層努力することが必要と判断される」（2校）
〈学校名〉
茨城県立竜ヶ崎第一高等学校 東京学芸大学附属国際中等教育学校

- ・「このままでは研究開発のねらいを達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の変更等の対応が必要と判断される」（0校）

- ・「現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても研究開発のねらいの達成は困難であり、スーパーサイエンスハイスクールの趣旨及び事業目的に反し、又は沿わないと思われるので、経費の大幅な減額又は指定の解除が適当と判断される」（0校）

○ 中間評価講評

1	茨城県立竜ヶ崎第一高等学校	<p>○特色あるカリキュラムの実施に加え、多くのイベントを企画する等、教員の熱意が感じられる。また、課題研究のテーマ設定については、生徒が主体的に設定できるよう計画しており、評価できる。</p> <p>○多くの取組を行い、意欲的ではあるが、一つ一つの取組内容の効果的な実施や必要性を検討し、改善していくことが重要である。</p> <p>○SSH クラス以外の生徒への SSH 事業による取組の成果の普及や理数系クラブの更なる活性化が期待される。</p>
2	千葉県立船橋高等学校	<p>○理数科を中心とした課題研究に加え、普通科の生徒も積極的に SSH プログラム等に参加している点が評価できる。</p> <p>○一つ一つの取組について、評価、検証をしっかりと行い、検証から明らかになった問題点について、具体的な改善策を講じ、今後の SSH 事業を展開していくことが重要である。</p> <p>○卒業生の追跡調査を引き続き継続するとともに、卒業生を活用した TA やキャリア教育等を実施していくことも期待される。</p> <p>○科学技術育成重点校においては、中核拠点校としての役割を果たしており、評価できる。一つ一つの具体的な課題とそれに対する改善策を講じていく等、モデル校として更に発展していくことが期待される。</p>
3	学校法人市川学園市川高等学校・市川中学校	<p>○中学からの体系的なプログラムになっており、課題研究を核とした探究的学習が全校的に取り組まれている。また、取組の中で高校から入学する生徒への十分な配慮をしており、評価できる。</p> <p>○SSH 事業の実施にあたり、課題研究と探究的な授業の二つの柱を重視することにより、実験中心の授業になってきている等、改善が見られることは評価できる。</p> <p>○課題研究で培われた力を更に伸ばす教育プログラムや、大学との連携を深めるプログラム等をより充実させることによって、生徒の能力を引き出し、成長させる機会を増やしていくことが期待される。</p>
4	東京学芸大学附属国際中等教育学校	<p>○課題研究を通して育てたい生徒の資質・能力についてしっかりと設定していることや、国際バカロレアの教育システムとの整合性を図りながら、理数系の探究活動を促す教育プログラム確立の試みを行っている点は評価できる。</p> <p>○国際バカロレアを踏まえて、SSH 校として何を指すのかをより明確にしていくとともに、SSH 事業により生徒をどう変容させたいかを</p>

		<p>十分に考慮して取り組んでいくことが重要である。</p> <p>○SSH、SGH、国際バカロレアそれぞれの特色やねらいを生かし、成果を出していくためにも、更なる検証と改善を進め、得られた成果を発信し、他校にも普及していくことが期待される。</p>
5	東京都立戸山高等学校	<p>○生徒が「課題を発見できるようになる」という点を重視し、課題研究に積極的に取り組んでいる点は評価できる。また、課題発見能力を育成するためには、生徒に試行錯誤させることも大切であるが、そのプロセスを重要視している点も評価できる。</p> <p>○他の SSH 指定校を含めた理系女子の交流会の開催や、近隣の中学生、他校の高校生を含めた生徒研究成果合同発表会の開催等、生徒が中心となって、成果を普及させる取組を行っていることは評価できる。</p> <p>○指定一期目、二期目よりも SSH 事業が学校全体としての取組として広がりつつあるが、多くの教員が対外的なイベントに参加するような仕組みづくりや、生徒が課題研究に取り組める時間の更なる確保等の工夫が期待される。</p>
6	富山県立富山中部高等学校	<p>○探究力を伸ばすために、探究モジュールを設定し、理数のみならず、他教科においても探究モジュールの方法を適応して、探究力を総合的に伸ばす取組を行う等、研究課題名および目的の第一に上げている「探究力」の育成に適切に取り組んでいる点が、大いに評価できる。</p> <p>○SSH 事業で、生徒のどのような資質・能力を伸ばしていくのかという点について具体的な目標を設定し、その実現・成果についてしっかりと評価しようとする点が評価できる。さらに、計画を単に実行するのではなく、議論しながら改善を加えて柔軟に対応していこうという点も評価できる。</p> <p>○生徒を海外へ派遣し、その成果を他の生徒にも文化祭などを通じて伝えてはいるが、より多くの生徒に成果を普及し、生徒の意識を高められるような取組の工夫や充実が期待される。</p>
7	福井県立藤島高等学校	<p>○課題研究に取り組む流れがしっかりと教育課程に位置付けられ、3年間の SSH 事業の取組の軸になっている。その他の取組も、多くの教員によって支えられており、組織的に進められている点が評価できる。</p> <p>○これまでの SSH 校としての課題を改善し、全校生徒の論理的思考力を高めるための取組が実施されており、評価できる。</p> <p>○生徒の更なる興味の深まりや、SSH 事業の取組への参加が増加するような工夫、卒業生の追跡調査やその活用等が期待される。</p>

		<p>○科学技術育成重点校においては、中高大接続の可能性を探る中核拠点校としての事業を進めており、中学生の参加者が増加していることは望ましい傾向である。今後とも、中核拠点校としての積極的な取組が期待される。</p>
8	学校法人大阪医科薬科大学 高槻高等学校・中学校	<p>○学校法人の支援の下、学校の特色を生かした、体制、施設、設備の充実を図りながら、SSH 事業を学校全体としての取組にしていこうとしている点は評価できる。</p> <p>○SSH 事業の担当教員に対して実施した意識調査において、生徒の変容等から、SSH 事業の取組が非常に効果的であったと回答しているものの、「地域の人々に学校の教育方針や取組を理解してもらう上で良い影響を与える」や「学校運営の改善・強化に役立つ」といった項目においては、肯定的に回答した割合は前年度と比べて低下している。この理由について分析し、取組を改善していくことが重要である。</p> <p>○SSH 事業を通じて、育成を目指す生徒像をより明確にし、その生徒像の実現に必要な取組を行っていくことが重要である。また、地域との連携や部活動への支援等、更なる取組の充実も期待される。</p>
9	岡山県立岡山一宮高等学校	<p>○生徒に身につけさせたい資質を「オクトースキルズ」として整理し、学校全体として、目標を共有し、事業を進めている点は評価できる。</p> <p>○全教員での指導体制が確立しつつあり、生徒も先輩の課題研究等をヒントに自ら課題を設定し意欲的に取り組んでいる。また、英語での発表も増えてきており、評価できる。</p> <p>○課題研究については、理数科に加え普通科にも広げて実施している。課題研究の深さは異なるものの、更に生徒の主体的な課題設定力の育成を高める方向性を探っており、評価できる。今後も、理数科で培った指導方法や支援体制を普通科にも十分に生かしていくことが期待される。</p>